

# 兵庫県相生市方言



兵庫県方言区画図

【兵庫県の方言区画】兵庫県は南北にわたっており、県内における方言差の大きい県の一つである。方言区画としては、一般に但馬方言・丹波方言・播磨方言・摂津方言・淡路方言の5つに分けられる。但馬方言は中国方言、丹波方言は京都方言、摂津方言は大阪方言に似た特徴を持つ。特に但馬方言は乙種アクセント地域であり、断定辞はダを使用し、w 語幹（ワ行五段）動詞過去形でアラッタ（洗った）のように促音便形をとるという点で兵庫県内のその他の方言とは異なる。淡路方言も播磨方言に属する明石市や摂津方言に含まれる神戸市と地理的には近いものの、断定辞ジャの使用が優勢であること、摂津方言・播磨方言にはない独特の終助詞を有することから、これらの方言域とは区別される。

播磨方言は兵庫県方言を代表するもので、県の中央を占めるものである。岡山県に接する播磨西部は準京阪式アクセント地域であり、播磨東部とは文法なども異なっているため、東播（東播磨）と西播（西播磨）に分けられる（鎌田 1979、鎌田 1982）。

【相生市方言について】国立国語研究所編（2002）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第13巻 大阪・兵庫』（以下『ことば集成』）によると、相生市は兵庫県の南西部に位置し、相生市方言は播磨方言に区画される。さらに、播磨方言の下位区分としての西播磨方言といわれる。西播磨方言は近畿方言の西端に位置するため、中国方言的な特色もみられる。その特徴としては「書いてや」（お書きになる）というようなテヤ敬語や、ヨル・トルのアスペクト対立等があげられる。また、『ことば集成』によるとイヌル（去める）、シヌル（死ぬる）といったナ行変格活用があるとされるが、今回の調査では見られず、使用者は減少傾向にあると考えられる。また、ガ行鼻濁音も同様であると思われる。

【表記について】ガ行鼻濁音は「ガ°」「キ°」「ク°」「ケ°」「コ°」と表記する。

【調査概要】本稿の記述は、相生市に生育した話者4名（A：1934年生まれ・女性（外住歴なし）、B：1948年生まれ・女性（26～27歳時飾磨郡在住）、C：1951年生まれ・男性（大学の4年間東京、大学卒業後2年間岡山に在住）、D：1958年生まれ・女性（外住歴なし））に対する聞き取り調査、及び筆者（相生市生育（22歳まで、1990年生まれ・女性）の内省をもとに行う。調査は2018年と2025年に実施し、2018年の調査ではAとC、2025年の調査ではB・C・Dの協力を得た。2025年の調査では、主に先行研究で記述されている形式についての確認を行った。

用例は、『ことば集成』及び筆者が2012年に収録した方言談話データ（話者は上述のA・D）による。なお、この談話収録には筆者も参加しているが、筆者の発話部分は用例としては使用していない。また、筆者による作例も適宜追加した。特に記載がない場合は作例である。筆者収録の談話データにはその旨記載する。『ことば集成』出典の用例は〔集成〕と記載する。原則として、元の資料の記載通りに引用するが、読みやすさを考慮してあいづちや言いよび等は適宜省略している場合がある。また、該当箇所の下線は筆者が加筆した。

## 兵庫県相生市方言の活用表

### 《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキ (一)	ミロ ミ (一)	コイ キ (一)	セー シ (一)
	禁止	カキナ	ミンナ ミナ (一)	クンナ クナ (一) キナ	スンナ スナ (一) シナ
	意志	カコ (一)	ミヨ (一)	コヨ (一)	ショー
	推量	カクヤロ (一)	ミルヤロ (一)	クルヤロ (一)	スルヤロ (一)
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カイタラ カイタ	ミタラ ミタ	キタラ キタ	シタラ シタ
派 生 類	否定	カカヘン カカン	ミーヘン ミン	コーヘン コン	セーヘン セン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス	ミサス	コサス	サス
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能肯定	カケル	ミレル	コレル	デキル デケル
	可能否定	カケ (一) ヘン カカレ (一) ヘン ヨーカカン	ミレ (一) ヘン ミラレヘン ヨーミン	コレ (一) ヘン コラレヘン ヨーコン	デケヘン デキヘン ヨーセン
	尊敬	カイテヤ	ミテヤ	キテヤ	シテヤ
	継続	カイトー カッキョー カキョー	ミトー ミョー	キトー キョー	シトー ショー
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクンヤ	ミルンヤ	クルンヤ	スルンヤ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/∅	買う ka(w)・u	コー-タ	wをR(長音)にする。wの前の母音がaの場合はoに変える。
	貰う mora(w)・u	モロ-タ	wを除く。wの前の母音がaの場合はoに変える。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生 [ガクセー] (だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカヤ	ガクセーヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	推量	アカイヤロ (一)	シズカヤロ (一)	ガクセーヤロ (一)
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	ガクセーノ
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	中止	アコーテ	シズカデ	ガクセーデ
	仮定	アカカッタラ	シズカヤッタラ	ガクセーヤッタラ
派生類	否定	アコーナイ	シズカヤナイ シズカ(ト)チャウ	ガクセーヤナイ ガクセー(ト)チャウ
	なる	アコーナル	シズカニナル	ガクセーニナル
	副詞	アコーソメル アコーニソメル	シズカニアルク	-
	丁寧	アカイデス	シズカデス	ガクセーデス
	のだ	アカインヤ	シズカナンヤ	ガクセーナンヤ

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型にはa類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類)動詞、一段型にはb類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の5形、および音便形がある。「カク」(書く)の場合カカン(kak・a-heN)、カキ-ヨ( kak・i-joR)、カク(kak・u)、カケル(kak・eru)、カイ-タ(kai-ta)など。また、語幹末子音にはk(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(タ行)、n(ナ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w(ワ行)がある。

鎌田(1988)は、「サ行イ音便がある。「傘をさして」をサイトとする形である。浮かして-ウカITE、下ろして-オロITE、残して-ノコITE、流して-ナガITE。時にはこのイがエとなり、ナガエテ(流して)となることもあるが、このイ音便は現在の中学生はほとんど使わないようだ。」(p.175)と述べているが、この形は『ことば集成』の談話、筆者収録の談話のいずれにも現れず、聞き取り調査では、「昭和30年くらいに高年層が使っていた。」「自分の祖母世代や親世代のことば。90代以上のことば。」とのことで、話者自身は使わないという認識であった。一段型にはミ-ル(mi-ru)、オキ-ル(oki-ru)など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。

不規則な活用をする動詞に「クル」(来る)と「スル」(する)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」はキータ(k・i-ta)、クール(k・u-ru)、コイ(k・o-i)などのように基幹が「キ」「ク」「コ」の3段に、「スル」はサーレル(s・a-reru)、シータ(s・i-ta)、スール(s・u-ru)、セー(s・e-R)などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」の4段にわたる。

「いぬ」「死ぬ」は「イヌル」「シヌル」となる場合があるが、高年層に限られる。大正8年(1919年)生まれの筆者の祖母(相生市生え抜き、外住歴なし)は「イヌル」「シヌル」を使用していたが、昭和9年(1934年)生まれの聞き取り調査の話者は調査において「シヌル」が出なかった。それ以降の生まれである男性話者と筆者も使用しないため、「イヌル」「シヌル」はかなり高齢の話者しか使用しないと思われる。

## (2)各活用形の特徴

### 〈断定非過去形〉

多段型動詞は基幹ウ段形、一段型動詞は基幹に「ル」が付いた形、「来る」「する」は基幹ウ段形に「ル」が付いた形となる。

- ・レポートワ アシタ カク。(レポートは明日書く。)

### 〈断定過去形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」は基幹イ段形に「タ」が付いた形となる。

- ・テガミ カイタ。(手紙[を]書いた。)
- ・ソノ エーガワ モー ミタ。(その映画はもう見た。)
- ・ヨー キタナ。(よく来たね。)

語幹末子音がw/∅の動詞は、「カウ(買う)」「テツダウ(手伝う)」「ミソコナウ(見損なう)」のように非過去形が2拍および4拍以上のものは基幹音便形が長音の形になるが、「モラウ(貰う)」「ワラウ(笑う)」のように3拍のものは非長音の形になる。

- ・ヨーケ コータナ。(たくさん買ったね。)
- ・オジーチャンニ オカシ モロタ。(おじいちゃんにお菓子[を]もらった。)
- ・シゴト テツドータ。(仕事[を]手伝った。)
- ・アイツノコト ミソコノータワ。(あいつのこゝと[を]見損なったよ。)

鎌田(1988)は、「思った・思うた」となるところを短くオモタとする。洗った・洗うた—アロタ、誘った・誘うた—サソタ、笑った・笑うた—ワロタ、食った・食うた—クタ、歌った・歌うた—ウトタ。(中略)ただし、「酔った・吸った」などはヨタ・スタとはならないようにすべてのものがあるわけではない。(p.175)と述べている。非過去形2拍の「クウ(食う)」が「クタ」となるのが例外となるが、非長音形は非過去形3拍の動詞に現れやすいと言える。なお、筆者の調査では、「食う」の過去形は「クータ」が最も一般的な形であった。「クタ」に関しては、話者Dは「メシクタカ?」のように疑問形でのみ使用することがあると回答した。また、話者Cは「上の世代のことば」という認識であった。

### 〈命令形〉

多段型動詞は基幹エ段形、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ロ」が付いた形、「来る」は「コイ」、「する」は「セー」となる。

- ・オマエ ヨワキンナツテ イネ イネ ユーテナー。(おまえ、弱気になって帰れ帰れ[と]言ってねえ。)[集成]

「ヤ」を後接して「カケヤ」「ミロヤ」「コイヤ」「セーヤ」となることもある。

- ・ハヨ コイヤ。(早く来いよ。)

「カキ(ー)」「ミ(ー)」「キ(ー)」「シ(ー)」のように基幹(多段型動詞・「来る」・「する」ではイ段形)あるいは基幹を長音化した形がある。これらに「ナ」もしくは「ヤ」が後接し、「カキーナ/カキーヤ」「ミーナ/ミーヤ」「キーナ/キーヤ」「シーナ/シーヤ」となる場合も多い。「ヨ」が後接する場合もある。

筆者の内省では、「カキー」類の後ろに何も後接しないものは命令の意味合いが薄く、勧誘・提案の意味合いで用いる。「ナ」「ヤ」「ヨ」が後接するものは命令で、「ヨ」「ナ」「ヤ」の順でより強い命令になる。

- ・コッチー キー。(こっちへおいで。)
- ・ヒダリ ミーヨ。(左を見てよ)(筆者収録、話者D)
- ・サツサト シーナ。(さっさとしなさい。)
- ・ハヨ シーヤ。(早くしろよ。)

また「カカンカイナ」「ミンカイナ」「コンカイナ」

「センカイナ」のように、否定疑問による行為指示が多く用いられる。

・モンク イワント ハヨ カカンカイナ。(文句 [を] 言わないで早く書かないか。)

動詞の連用形に「ナイ(ナ)」をつけて「カキナイ」「カキナイナ」とする形もある。

・ハヨー カキナイナ。(早く 書きなさいよ。)

#### 〈禁止形〉

断定非過去形に「ナ」を後接させる。ただし「クルナ」は使われづらい。「カクナ」「ミルナ」など他の動詞でも筆者の内省ではあまり使われることはない。末尾拍がルの動詞では、「ル」が撥音便化を起こし、「ミンナ」「クンナ」「スンナ」のようになることもある。こちらはよく使われるが「ヤ」が後接することが多い。

・コッチ クンナ。(こっち [に] 来るな。)

また、一段型動詞の基幹(=語幹)と「来る」「する」の基幹「ク」「ス」に「ナ」を後接させてつくる形もある。

・ソナナコト スナ。(そんなことするな。)

多段型動詞の基幹イ段形、一段型動詞の基幹(=語幹)、「来る」「する」の基幹イ段形に「ナ」を後接させて禁止の意味になることもあるが、その場合は「カキナヤ」というように「ヤ」が後接する。禁止の度合いは薄くなり、たしなめる程度になる。

・トモダチニ イジワル シナヤ。(友達に意地悪をしないでね。)

禁止形は「きつい言葉」と感じている話者も多く、特に女性に顕著である。その場合は禁止形は使わず「ミタラ アカン」などの「仮定形+アカン」になることが多い。この場合仮定形は「ミタ アカン」のように「ラ」を発音しない場合も多い。

・トモダチニ イジワル シタ アカン。(友達に いじわる [を] してはいけない。)

#### 〈意志形〉

多段型動詞は基幹オ段形の末尾母音を長音化させる。一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」は「コ」に「ヨー」を付ける。「する」は「ショー」となる。長音が短呼化する場合もある。

・レポートワ アシタ カヨー。(レポートは明日書こう。)

#### 〈推量形〉

断定形に「ヤロ(一)」を後接する。

・オソラク ガッコエ イクマデニワ モーショーショーヤッタラ オヨキ<sup>°</sup> ヨッタヤローナ。(おそらく学校へ行くまでにはもう少し少々だったら泳いでいただろうね。)[集成]

#### 〈連体非過去形〉

断定非過去形と同形である。

・レポート カク トキニ イッショニ ヤルフ。(レポート [を] 書く時に一緒にやるよ。)

#### 〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

・オーバーチャング キタ トキノ シャシンヤ。(おばあちゃんが来た時の写真だ。)

#### 〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」は基幹イ段形に「タ」が付いた形となる。断定過去形と同様に、語幹末子音がw/θの動詞は、非過去形が2拍および4拍以上のものは基幹音便形が長音の形になるが、3拍のものは非長音の形になる。

・エーガ ミテ ソノアト カイモノ イク。(映画 [を] 見てそのあと買物 [に] 行く。)

・オカシ モロテキタ。(お菓子 [を] もらってきた。)

・シゴト テツドーテ。(仕事 [を] 手伝って。)

#### 〈仮定形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」は基幹イ段形に「タラ」が付いた形となる。「タラ」の「ラ」が脱落した言い方もある。

・ナンボグライノ トシカラ オヨキダシタンカー ユテ キカレタラナ、ワカラン。

(「何歳ぐらいの歳から泳ぎ始めたのか」[と] 言って訊かれたらね、わからない。)[集成]

・シタ エーノニ。(したらいいのに。)

鎌田(1988)は、「タラをつけて仮定条件をあらわす。読ンダラ・見タラ・受ケタラ・来タラ・シタラである。(中略)また、「置けばよいのに」は、置カエエノニ・置キャエエノニとなる。同様に、行キャエエノニ・寝リャエエノニ・取リャエエノニとなる。来タラ・シタラとともに、クリャ・スリャの形も併用する。」(pp. 174-175)と述べているが、「タラ」

の使用が優勢である。筆者による調査では、「スリヤ」のような形について、話者Dは「使わない」と回答したのに対し、話者Bと話者Cは「使う」と回答した。ただし、話者Cは「オキヤ」「ネリヤ」は使用するが「イキヤ」「トリヤ」「クリヤ」「スリヤ」は「自分より上の人のことば」と回答しており、動詞によって許容度に差があるようである。

〈否定形〉

多段型動詞は基幹ア段形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」は「コ」に、「する」は「セ」に「ン」が付く。この形は以下のように活用する。中止形の「カカイデ」「カカンデ」は「上の世代のことば」という認識であり、現在の高年層でもあまり使われない。また、中止形の「カカント」と仮定形の「カカント」はアクセントが異なっており、中止形は「カカント(HHLL)」で仮定形は「カカント(LLLH)」である(Hは高い拍、Lは低い拍を示す)。

断定非過去	カカン
断定過去	カカナンダ・カカンカッタ
中止	カカズニ・カカント・カカイデ・カカンデ
仮定	カカナ・カカナンダラ・カカンカッタラ・カカント

また、多段型動詞は基幹ア段形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ヘン」が付く形もある。「ヘン」が後接する時、基幹の長さが1拍の場合には「ミーヘン(見ない)」「ネーヘン(寝ない)」のように長音化する。「来る」は「コーヘン」、「する」は「セーヘン」となる。この形は以下のように活用する。

断定非過去	カカヘン
断定過去	カカヘナンダ・カカヘンカッタ
中止	カカヘンデ・カカヘント
仮定	カカヘナンダラ・カカヘント・カカヘンカッタラ

鎌田(1988)は、「ヘン」が続くときの形として、「着ーヘン・着ヤヘン」「(来) コーヘン・キヤヘン」「勉強セーヘン・勉強シヤヘン」のように「ヤ」の入る形と入らない形が併用されるとし、また、「起キーヘン」「落チーヘン」「延ビーヘン」「降リーヘン」「植エーヘン」のように、基幹の長さが2拍以上の語についても長音の形になるとしている(p.174)。

筆者が実施した調査においては、話者Dが「ミエヘン」という形を回答しており、「エ」が入る形も存在するようである。

また、鎌田(1988)は、「動词语幹の語尾がイ段であるときは同化されてヒンとなる。着ーヒン・見ーヒン・落チーヒンなど。」(p.177)と述べている。筆者が実施した調査では、話者によって使用する動詞に差異があり、話者Cは「使用しない」、話者Bは「ミーヒン」は使うが「オチーヒン」は使わない、話者Dは「ミーヒン」「オチーヒン」とも使う」という回答であった。

- ・ナンボグライノ トシカラ オヨキダシタンカー ユテ キカレタラナ、ワカラン。(「何歳ぐらいの歳から泳ぎ始めたのか」[と]言っ  
て訊かれたらね、わからない。)[集成]
- ・マケタラ ハジヤ ユーコトモ オモワヘンシ。(負けたら恥だ[と]いうことも思わ  
ない。)[集成]
- ・シー ンー ンナ メージヤ。 アンタ ダ  
ンプ ミズ ミ ソージ セーヘンヤロ?  
(んーんー、だったら明治だ。あなたランブ  
×××掃除[を]しない[=しなかった]だ  
ろう?) [集成]

過去の否定形は、非過去否定形に「カッタ」を後接させて「カカンカッタ」「カカヘンカッタ」のようになる。非過去の否定形の「ン」「ヘン」に代えて「ナンダ」「ヘナンダ」を後接させた「カカナンダ」「カカヘナンダ」のような形もあるが、若年層はあまり使わなくなっている。

- ・アレ ヨー ミナンダ。(あれ[は] よく 見  
ていなかった。)(筆者収録、話者A)
- ・ホデ シタ ムケトッタラ イツマデモ カ  
ワカヘンデ。 シズクガ オチタラ ウエ  
ムケナンダラ。 ジョーハツ サセナ。(そ  
れで [洗った瓶を] 下 [に] 向けていたら  
い つまでも乾かないよ。滴が落ちたら上 [に]  
向けなければ。[水を] 蒸発させないと。)(筆  
者収録、1958年生まれ女性)

鎌田(1988)は、「ン」の連用形(中止形)「ズ」について、「今日、午前中ナンニモセズジャ。」「ナンニモセズニ文句バツカリ言う。」という例文をあげ、「ズジャ・ズヤ、ズニはこの形で慣用的に用いる。」

(p.177)と述べている。まず、「ズニ」については、高年層を中心に現在も使用されているが、若年層はあまり使用しない。

- ・オピモ セズニ ガッコーエ キテーテ ユ  
ワレタ コト オモウワ。(帯もしないで学  
校へきてって言われたこと[を]思うよ。)[集  
成]

「ズジャ・ズヤ」のような「ズ+コピュラ」の形については、粟野(1997)が「単なる打ち消しではなく、過去や完了の打ち消しの意味で使われている」(p.15)と述べている。粟野(1997)は高砂市や加古川市といった播磨地方南東部を調査したもののだが、播磨地方南西部の相生市方言でも同様の用法がみられる。この形式は現在も高年層を中心に使用されている。筆者も使用するが、若年層は高年層と比較するとあまり使用しない。

- ・モー キョーワ ノーサギョー ヤラズヤ。  
(もう今日は農作業をやらなかった。)

〈丁寧形〉

多段型動詞は基幹イ段形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」は基幹イ段形に「マス」が付く。

- ・ソーユーコトデ モ ミナー、 キタエトー  
カラナー。 ソノ イマデモ トツショリ  
ネバリズヨインヤロ オモイマスワ。 ナー。  
(そういうことで、もうみんな鍛えているからねえ。その、今でも老人[は]粘り強いんだろう[と]思いますよ。ねえ。)[集成]

鎌田(1988)によると、「マス」に該当する形として「マハン」があるとしている。「マス→マッセ→マッハ→マハン」のように変化したもので、「行きマハン(行きますよ)」のような形となるという。この形は「赤穂市に多い形である。相生市にも古くはあったが、最近は少なくなった」(p.178)としている。この形は『ことば集成』の談話では確認されなかった。筆者の調査では自分で使う話者はいなかったが、「イキマハーなら聞いたことがある」と回答する話者がおり、「明治生まれの曾祖母が使っていた」(話者D)、「赤穂から相生にきた女性が使っていた」(話者B)とのことであった。

〈使役形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「ス」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「サス」が、「来る」は「コ」に「サス」が、「する」は「サ」に「ス」が付く。使役形は多段型動詞に準じた活用をする。

鎌田(1988)は、「セル・サセルもあるが、ス・サスの方が多く、当市においてはス・サスの方が一般的である。(中略)一段活用動詞のラ行五段活用化により、受ケラス・受ケラシテミー(受けさせてみよ)、来ラス・来ラシテミーとなり、来サシテミーと併存する。」(p.177)と述べているが、「ラス」の形は筆者の調査において、話者Dのみが「受ける」の使役形のみで使用するかもしれないと回答している。その場合は他者に対して「ウケラシテミーナ(受けさせてみなさい)」とアドバイスするような形なら使いやすいと回答しており、「ウケラス」という形では言わないことはないが実際に口にすることは少ないということである。

- ・ニッキオ カカス。(日記を書かせる。)

〈受身形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「レル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラレル」が、「来る」は「コ」に「ラレル」が、「する」は「サ」に「レル」が付く。受身形は一段型動詞に準じた活用をする。

- ・ソレニ イマカラ オモタラ ソノー アノ  
ー ワシラデモ ヨー オコラレタモンヤ。  
(それに今から思えば、その、あの、私たちでもよく叱られたものだ。)[集成]

〈可能形〉

可能の意味の区別なく用いられる汎用の可能形と能力・心情可能専用の可能形がある。

		汎用	能力・心情
書く	肯定	カケル	
	否定	カケヘン カケーヘン カカレヘン カカレーヘン	ヨー カカン
見る	肯定	ミレル	
	否定	ミレヘン ミレーヘン ミラレヘン	ヨー ミン
来る	肯定	コレル	

	否定	コレヘン コレヘン コラレヘン	ヨー コン
する	肯定	《デキル》 《デケル》	/
	否定	《デキヘン》 《デケヘン》	

可能形は、肯定形では、①多段型動詞の基幹エ段形に「ル」、一段型動詞の基幹(=語幹)、「来る」の基幹オ段形「コ」に「レル」が付く形「カケル」「ミレル」「コレル」が用いられる。否定形では、①の形の否定形「カケヘン」「ミレヘン」「コレヘン」と、②多段型動詞の基幹ア段形に「レル」、一段型動詞の基幹(=語幹)、「来る」の基幹オ段形「コ」に「ラレル」が付く形の否定形「カカレヘン」「ミラレヘン」「コラレヘン」が用いられる。①の形の否定形は、「カケーヘン」「ミレーヘン」「コレヘン」のように「ヘン」の前の音節が長音化する場合がある。②の形の否定形は、多段型動詞では「カカレーヘン」のように「ヘン」の前の音節が長音化する場合がある。これらは一段型動詞に準じた活用をする。「する」は代替動詞「デキル」「デケル」を用いる。

また、③「ヨーカカン」のような「ヨー+動詞否定形」の形もある。③は心情・能力可能の意味のみ用いられるが、①②(とその長音挿入形)は能力可能・状況可能どちらの意味でも用いられる。

- ・コノコワ モー カンジガ カケル。(この子はもう漢字が書ける。)
- ・コノコワ マダ カンジガ {カカレヘン/カカレーヘン/カケヘン/カケーヘン}。(この子はまだ漢字が書けない。)
- ・ホーボニ プールガ デキタカラ アレ、ヨーオヨカン コカ<sup>°</sup> デキタ(あちこちにプールができたから、あれ、泳げない子ができた) [集成]

〈尊敬形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」は「キ」「シ」に「テヤ」を後接し、「カイトヤ」「ミテヤ」「キテヤ」「シテヤ」のようになる。過去形の場合、多段型動詞は基幹音便形、一段動詞は基幹(=語幹)、「来る」はキ、「する」はシに「タッタ」を後接させ、「カイタ

ッタ」「ミタッタ」「キタッタ」「シタッタ」のようになる。継続形の場合、多段型動詞の基幹音便形、一段型動詞の基幹(=語幹)、「来る」「する」の「キ」「シ」に「トツテヤ」が後接する。

- ・ヨー キオクシトツテヤナー(よく記憶していらっしやるねえ) [集成]

近年、近畿中央部で用いられる「ハル」が流入しつある。当地で用いられる「ハル」は、多段型動詞では基幹イ段形に、一段型動詞では基幹(=語幹)に、「来る」「する」では「キ」「シ」に後接する。今回の聞き取り調査の話者のうち、女性話者は「ハル」を用いず、男性話者は限定的に「ハル」を用いていた(「カキハル」と「見ていらっしやる」に相当する(テイル+ハル)の「ミテハル」)。筆者は「ハル」を用いるが、これは関西中央部に移住してから習得したものである。現在も自然にはなく意識的に使用しているため、「ハル」の使用に関しては世代差、個人差がかなり大きいと思われる。

〈継続形〉

結果継続を表す形として「トー」がある。「トー」は「トル」の「ル」が長音化した形であり、「トル」の形で現れる場合もある。「トー(トル)」は、多段型動詞の基幹音便形、一段型動詞の基幹(=語幹)、「来る」の「キ」、「する」の「シ」に後接する。

- ・マダ サンサイヤノニ ヨー カケトーワ。(まだ 3歳なのに よく 書けているよ。)
- ・ソヤカラナー イマノ コドモワ アソビヤトカ ナンヤ ユータッテ ミンナ ソノー アノー アソビドーク<sup>°</sup> ヤトカ ナンヤオ アタエテモロテ、ソレデ ヤツトルヤロ?(だからねえ、今の子供は遊びだとか何とか言っても、すべてその、あの一、遊び道具だとか、何かを与えてもらって、それでやってるだろう?) [集成]

動作の進行を表す形として「ヨー」がある。「ヨー」は「ヨル」の「ル」が長音化した形であり、「ヨル」の形で現れる場合もある。「ヨー(ヨル)」は、本来は、多段型動詞の基幹イ段形、一段型動詞の基幹(=語幹)、「来る」の「キ」、「する」の「シ」に後接するが、相生市方言では、基幹の末尾音節が「ヨー(ヨル)」と融合してオ段拗音化し、当該音節の前に促音もしくは撥音を挿入する形になることが多い。

辰浜 (1977) の記述をもとにヨー形の語例をあげる。( ) 内は筆者による調査で補った形式である。丸数字は「ヨル」に前接する基幹の音節数である。

活用型	基幹末音節	動詞	ヨー形
多段型	ki	書く②	カッキョー
		行く②	イッキョー
		たたく③	タタッキョー
		歩く③	アルッキョー
	gi	(漕ぐ)②	(コッキョー)
	si	(出す)②	(ダッキョー)
	ci	(立つ)②	(タッキョー)
	ni	死ぬ②	シンニョー
	bi	飛ぶ②	トツビョー
	mi	(読む)②	(ヨミョー) (ヨンミョー)
	ri	ある②	アツリョー
	i	降る②	フツリョー
		嫌う③	キライョー
	一段型	ki	着る①
起きる②			(オキョー) (オッキョー)
gi		過ぎる②	(スギョー) (スoggiョー)
ci		落ちる②	(オチョー) オッチョー
bi		浴びる②	(アビョー) (アツビョー)
		滅びる③	(ホロツビョー)
mi		見る①	(ミョー)
		染みる②	(シミョー) (シンミョー)
ri		降りる②	(オリョー) (オツリョー)
		老いる②	(オイョー)
ke		かける②	カケョー
		にやける③	ニヤケョー
ge		上げる②	(アゲョー)
		広げる③	(ヒロゲョー)
se	痩せる②	(ヤセョー)	
	合わせる③	(アワセョー) (アワツショー)	

	te	当てる②	(アテョー)
		慌てる③	(アワテョー)
	ne	寝る①	(ネョー)
		真似る②	(マネョー)
		重ねる③	(カサネョー)
	be	食べる②	(タベョー)
		調べる③	(シラベョー)
		止める②	(トメョー)
	me	集める③	(アツメョー)
		慰める④	(ナグサメョー)
		漏れる②	(モレョー)
	re	暴れる③	(アバレョー)
		燃える②	モエョー
	e	変える②	(カエョー)
植える②		(ウエョー)	
来る	ki	来る	キョー キョー
する	si	(する)	(ショー) (ショー)

「ヨー (ヨル)」は将然・進行・習慣を表し、「トー (トル)」は結果継続を表す。

- ・パート イキヨツタラ マタ オナゴ° ノ ヒトガ° デテキテナ、(パートと行っていたらまた女の人が出てきてね、) [進行] [集成]
- ・イマ ガツコーニ イッキョー トコヤ。(今学校に 行っている ところだ。)[進行]
- ・ホヤケド ドナエナ ドヤーナコトシテ アソビヨツタヤロカナ。(だけどどんな、どんなこと [を] して遊んでいたのだろうか。)[習慣] [集成]
- ・コドモノ コロワ ヨー ウミデ {アソンビヨツタ/アソツビヨツタ}。[習慣]
- ・ソーユーコトデ モ ミナー、キタエトーカラナー。ソノ イマデモ ソ トツショリ ネバリズヨインヤロ オモイマスワ。ナー。(そういうことで、もうみんな鍛えているからねえ。その、今でも、老人 [は] 粘り強いんだらう [と] 思いますよ。ねえ。)[結果継続] [集成]

〈希望形〉

多段型動詞は基幹イ段形に、一段型動詞は基幹

(=語幹)に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に「タイ」を後接する。

- ・アノー、カイタイ ヒトワ コータラエーユテ ゴバンノ フクオ コータンヤ、(あの、買いたい人は買えばいい [と] 言って、碁盤の服を買ったのよ、) [集成]

〈のだ形〉

断定形に「ンヤ」を後接する。

- ・サエ オモウンヤ (そう思うんだ) [集成]

## 2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の交替語幹は、語幹末母音が a の場合にアカ>アコ (赤い) のように、語幹末母音の a を o に替えて作る。この場合、「アコー」のように長音化することがある。また、語幹末母音が e の「エー (良い)」では o に替わり「ヨ (一)」が交替語幹となる。中止形、否定形、なる形、副詞形でこれらの交替語幹やその長音形が現れる。語幹末母音が u・o の場合は語幹が交替することはなく、中止形などでも語幹やその長音形が用いられる。

〈断定非過去形〉

共通語の形容詞と同様にイ語尾で終わる。

- ・コノ トマト ゴツツー アカイ。(このトマト [は] すごく赤い。)

鎌田 (1988) は、「語幹のまま、「ナガ (長)」には「ああ、ナガ」の形で使われる。」(p.176) と述べているが、形容詞の語幹の述語用法には、詠嘆の意味が加わる。

- ・コノ トマト アカ。(このトマト[は]赤い。)

〈断定過去形〉

語幹に「カッタ」を後接した形が用いられる。

- ・キョーワ サムカッタ。(今日は寒かった。)

〈推量形〉

断定形に「ヤロ (一)」を後接した形になる。鎌田 (1988) は「長い」「無い」の推量形として「ナガカロ」「ナカロ」をあげているが、この形は『ことば集成』の談話では確認されなかった。筆者の調査では話者Dのみが「ナガカロナー」は使うかもしれないが頻度は高くないという回答であった。話者Bと話者Cの男性は「上の世代のことば」という認識であった。

- ・デ ソノ ミズノ ソノ オンド ユーコトオ ハジメテ、コー、アツイヤロナー オモテ イタ モ、 ツメターイ ユーカンジカ° シテ、 ウミ ハイッタトキネー。(で、その水の、その、温度 [と] いうことを初めて、こう、熱いだろうな [と] 思って行ったら、もう、冷たい [と] いう感じがして、海 [に] 入った時 [に] ねえ。) [集成]

〈連体非過去形〉

断定非過去形と同形である。

- ・アツイ トキニ ヨー キタナ。(暑い時によく来たね。)

〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

- ・マダ パーチャンガ ワカカッタ トキノシャシンヤ。(まだばあちゃんが若かった時の 写真だ。)

〈中止形〉

語幹末母音が交代するものは交替語幹の長音形に、「テ」を後接する。幹末母音が i, u, o のものは「ウレシーテ (嬉しくて)」「サムーテ (寒くて)」「シツコーテ (しつこくて)」など、語幹末を長音化して「テ」をつける。

- ・コッチノ ホーガ アモーテ オイシーワ。(こっちの方が甘くておいしいわ。)
- ・パーチャン ウレシーテ ナキソーヤ。(ばあちゃん [は] うれしくて泣きそうだ。)

〈仮定形〉

語幹に「カッタラ」を後接する。鎌田 (1988) は「長い」「無い」の仮定形として「ナガケリヤ」「ナケリヤ」をあげているが、この形は『ことば集成』の談話では確認されなかった。筆者の調査では「ナケリヤ」について、話者Bと話者Cは「使用する」と回答した。「ナガケリヤ」は話者Bによると「同世代以上の人には使っている人もいる」ということである。

- ・ボール ヒロタモンカ°、ハシルンカ° オソカッタラ アプト、ユーテ ソノコニヒツツケテヤナー、デ ソレカ° マケヤ。(ボール [を] 拾った者が、走るのが遅かったら「アプト」[と] 言ってその子にくっつけてだねえ、それでそれが負けだ。) [集成]

## 〈否定形〉

交替語幹の長音形に、「ナイ」を後接する。長音形でない場合もある。幹末母音が i, u, o のものは「ウレシーナイ(嬉しくない)」「サムーナイ(寒くない)」「シツコーナイ(しつこくない)」など語幹末を長音化して「ナイ」をつける。長音系でない場合もある。「ヨーナイ(良くない)」は必ず長音になる。「濃い」は「コイーナイ」「コイーコトナイ」「コクナイ」になる。

- ・コノ トマトワ ゼンゼン {アコーナイ／アコナイ}。(このトマトは全然赤くない。)
- ・キョーワ ゼンゼン {サムーナイ／サムナイ}。(今日は全然寒くない。)
- ・コノママヤト ヨーナイナ。(このままだとよくないね。)
- ・アジガ コイーナイカラ オイシーワ。(味が濃くないからおいしいわ。)

## 〈なる形〉

交替語幹の長音形に、「ナル」を後接する。長音形でない場合もある。

- ・アンタワ サムイト スグ ホッベガ {アコー／アコ} ナルナー。(あなたは寒いとすぐ頬が赤くなるね。)

## 〈副詞形〉

交替語幹の長音形、もしくは交替語幹の長音形に「ニ」を後接する。

- ・ヌノオ アコーニ ソメル。(布を赤く染める。)

## 〈丁寧形〉

断定形に「デス」を後接する。

- ・サカオ ノボルノワ ツライデス。(坂をのぼるのはつらいです。)

鎌田(1988)では「デス」に相当する形として「ダハン」を挙げている。「ダス」が「ダッセ→ダッハ→ダハ」となり、それをさらに強めて「ダハン」のように変化したものとしているが、この形は『ことば集成』の談話では確認されなかった。筆者の調査では、実際に使用すると答えた話者はいなかったが、「ダハー」は聞いたことがあるという回答を2名から得た。「相生の同世代くらいの人で使っていた人がいたが、かなり少数。使っていた人の両親がどこの出身かはわからない。」(話者C)、「かなり世代が上の赤穂の人のことば」(話者B)とのことで、赤穂市

のことばという意識が強かった。

## 〈のだ形〉

断定形に「ンヤ」を後接する。

- ・ソヤカ モー ソノ カイスイキ<sup>°</sup>ー ユーコトワ、 モー モットライデモエーンヤ。(だからもうその海水着 [と] いうことは、もう持っていないでもいいんだ。)[集成]

## 〈継続形〉

鎌田(1988)は、形容詞「無い」のヨー形として「ナカリヨッタモンヤ(無かったものだ)」をあげているが、こうした形容詞の「ヨー(ヨル)」の形は筆者の調査および『ことば集成』の談話では確認されなかった。話者Cによると「自分よりもかなり上の世代が使っていたかもしれない」ということである。また、相生市の近隣の地域であるたつの市御津町室津で形容詞の「ヨー(ヨル)」の形について1948年生まれの女性(外住歴なし、話者Bとは別人)に調査したところ、「上の世代の男性が「ナガカリヨッタ」「ナガカッリヨッタ」を使っていた」という証言を得た。なお、室津は古くからある漁港であり、使っていたとされる人は漁師をしていたそうである。

## 【形容名詞述語・名詞述語】

## 〈断定非過去形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ヤ」が後接する。

鎌田(1988)は「当地では、ジャが古く、ヤが新しい形として並存する。」「老人はジャ、若い人はヤである。」としている(p.178)。筆者の調査および『ことば集成』の談話では「ジャ」の使用は確認されず、「ヤ」が使用が確認された。

- ・ワタシ ドーキューセヤ。(私[は]同級生だ。)

[集成]

## 〈断定過去形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ヤッタ」が後接する。

- ・ソヤロ ワシラ ゴネンセーヤッタ。(そうだろう、私たちは5年生だった。)[集成]

## 〈推量形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ヤロ(一)」が後接する。

- ・マチヨリ ヤマノホーガ シズカヤロ。(街より山の方が静かだろう。)

〈連体非過去形〉

形容名詞述語は形容名詞に「ナ」を後接する。名詞述語は名詞に「ノ」を後接する。

- ・フリムイタラ キレーナ モモワレニ ユートンデ、(振り向いたらきれいな桃割れに[髪を]結っているから) [集成]

〈連体過去形〉

断定過去形と同形である。

- ・ワシガ ガクセヤッタ トキノ ハナシヤ。  
(私が学生だった時の話だ。)

〈中止形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「デ」が後接する。

〈仮定形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ヤッタラ」が後接する。

- ・マ ソノク<sup>o</sup> ライナ テードノ オモチャヤッタラ、カエルンヤ ワシラデモナ、(まあそのくらいの程度のおもちゃだったら、買えるんだ、私たちでもね。) [集成]

〈否定形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ヤナイ」「(ト) チャウ」が後接する。

- ・アノヘンワ ゼンゼン シズカヤナイ。(あの辺は全然静かじゃない。)
- ・アノコ モー ガクセチャウデ。(あの子[は]もう学生じゃないよ。)

〈なる形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ニナル」が後接する。

- ・ヤサイオ タベタラ ゲンキニナル。(野菜を食べたら元気になる。)

〈副詞形〉

形容名詞に「ニ」を後接する。

- ・トショカンデワ シズカニ シヨナ。(図書館では静かにしようね。)

〈丁寧形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「デス」が後接する。

- ・コノコワ ライネン ショーガクセーデス。  
(この子は来年小学生です。)

〈のだ形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに形容名詞・名詞に「ナンヤ」が後接する。

- ・オトナガ<sup>o</sup> カッテナンヤ。(大人が 勝手なんだ。) [集成]

用例出典

[集成]: 国立国語研究所編 (2002) 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第13巻 大阪・兵庫』 国書刊行会

参考文献

- 粟野英恵(1997)「兵庫県播磨地方における打ち消し助動詞「ズ」の方言的用法」『地域言語』9、天理・地域言語研究会
- 岡田荘之輔・楳垣実(1962)「兵庫県方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 鎌田良二(1979)『兵庫県方言文法の研究』桜楓社
- 鎌田良二(1982)「兵庫県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会
- 鎌田良二(1988)「相生市方言」『甲南文学』35
- 国立国語研究所編(2002)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第13巻 大阪・兵庫』国書刊行会
- 辰浜マリ子(1977)「相生方言のアスペクトー「居る」・「て居る」について一」『都大論究』14 (山本空)